

体 育 科

1 育成したい「思考力」

- a めざす動きやよりよい生活と自己の現実を照らし合わせながら、自己の能力に合ったイメージをもち、適切な課題を設定する力
- b 課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

- a めざす動きやよりよい生活と自己の現実を照らし合わせながら、自己の能力に合ったイメージをもち、適切な課題を設定する力

「自己の能力に合ったイメージをもち」とは、めざす動きや生活と、自己の現実の有り様を比較したことを基に、「なりたいイメージ」を描き出す力のことである。それらは実際に試してみたり振り返ってみたりすることによって捉えることができると考える。

この自己の現実をどう捉えるかは、「適切な課題を設定する」上で大きな意味をもっている。それは、自己の現実が適切に認識されていないならば、めざす動きやよりよい生活との差異点も不明瞭なままで、その結果、「なりたいイメージ」が曖昧なものになってしまうからである。曖昧なイメージのままでは、適切な課題を設定することはできない。

また、「適切な課題を設定する力」とは、的確に捉えた自己の現実と、めざす動きや現実との比較から生まれた「なりたいイメージ」により近づくために、自己の現実を再度確認しながら、何がどうなればよいかについて考える力のことである。

- b 課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

これは、課題に対して、類似した過去の運動経験や生活場面を想起し、その際用いた手だてを生かそうとしたり、めざす動きを具体的に分析・細分化し、自己が補わなければならない点を選択したりして、解決を図っていく力のことである。

「跳び箱の開脚跳び」を例に考えてみよう。

前者は練習方法を見出す際に、「手の突き放しを強く」という課題に対して低学年で経験した「馬跳び」を、また、「腰を高く」という課題に対して過去の遊びから「カエルの足うち」を想起するような思考である。

後者は、今の自己の現実と照らし合わせると、跳び方の美しさに関する課題である「腰の高さ」よりも、跳ぶ動きそのものの課題である「手の突き放し」に関する練習方法を選択するといった思考である。

無論、このような力は保健領域においても必要である。

なお、本校体育科では、学習対象についての経験が少ない低学年では、解決の手だてそのものを見出す力よりも、教師の提示したいくつかの選択肢の中から自分に合ったものを選ぶ力を育成することを重視している。

